



BOM 監視オプション for Oracle ユーザーズ マニュアル

免責事項

本書に記載された情報は、予告無しに変更される場合があります。セイ・テクノロジーズ株式会社は、本書に関していかなる種類の保証（商用性および特定の目的への適合性の黙示の保証を含みますが、これに限定されません）もいたしません。

セイ・テクノロジーズ株式会社は、本書に含まれた誤謬に関する責任や、本書の提供、履行および使用に関して偶発的または間接的に起こる損害に対して、責任を負わないものとします。

著作権

本書のいかなる部分も、セイ・テクノロジーズ株式会社からの文書による事前の許可なしには、形態または手段を問わず決して複製・配布してはなりません。

Copyright © 2007-2010 SAY Technologies, Inc. All rights reserved.

本ユーザーズマニュアルに記載されている **Microsoft, Windows** は、米国 **Microsoft Corporation** の米国及びその他の国における登録商標です。その他会社名、製品名およびサービス名は各社の商標または登録商標です。

目次

1	システム構成.....	4
1-1	事前準備.....	5
1-2	インストール.....	6
1-2-1	インストール手順.....	6
1-3	アンインストール.....	9
1-3-1	アンインストール手順.....	9
2	Oracle 接続情報の登録と削除.....	11
2-1	Oracle データベースサービス接続情報の登録.....	11
2-2	Oracle データベースサービス接続情報の削除.....	12
3	監視項目の作成.....	13
3-1	テンプレートのインポートより作成.....	13
3-2	「監視」ノードのポップアップメニューより作成.....	14
4	各監視項目の機能と設定方法.....	16
4-1	表領域の使用容量、使用率監視.....	17
4-2	同時セッション数監視.....	19
4-3	表領域の最大空き容量監視.....	21
4-4	エクステント増分回数監視.....	23
4-5	ストアドファンクションの実行.....	25
5	付録.....	27
5-1	各監視項目のエラーメッセージ一覧.....	27

1 システム構成

BOM Oracle 監視オプション(以下 Oracle オプション) Ver.5.0 は、BOM for Windows Ver.5.0(BOM5.0)が導入済みの Windows コンピュータにインストールし、Oracle データベースを監視するためのオプション製品です。

- BOM5.0を導入した Windows 2000、Windows Server 2003、Windows Server 2008 コンピュータにインストールして使用します。
- Oracle オプションは、Oracle をインストールしたコンピュータ上で動作します。
- BOM5.0と Oracle オプションをインストールした Windows コンピュータ上で、監視結果の表示やステータス表示、ログ表示などを行うことができます。

<動作環境>

ハードウェア/ソフトウェア	動作要件
監視対象 Oracle コンピュータ	
■ 最低限のハードウェア要件	使用する Oracle の動作要件に準じる
■ 対応 OS	Windows 2000 Server SP4 日本語版 Windows Server 2003, Standard Edition / Enterprise Edition (32bit 版,64bit 版) 日本語版 Windows Server 2008 Standard Edition / Enterprise Edition (32bit 版、64bit 版)日本語版 ※サービスパックは、BOM 5.0 および使用する Oracle の動作要件に準じる
■ 対応 BOM バージョン	BOM for Windows Ver.5.0SR3
■ Oracle バージョン	Oracle 9i Release1, Oracle 9i Release 2 Oracle 10g Release1,Oracle 10g Release2,Oracle 11g Release1
■ 対応 Oracle Client	Oracle バージョンに標準で添付される Oracle Client

Oracle オプションは、既に BOM5.0 がインストールされ、正常に動作していることを前提としています。また、監視対象の Oracle が Oracle オプションと同一コンピュータ上にあることを前提としています。BOM5.0 がインストールされていない場合は、まず BOM をインストールし正常に動作することを確認してから、このマニュアルに従って Oracle オプションをインストールして下さい。

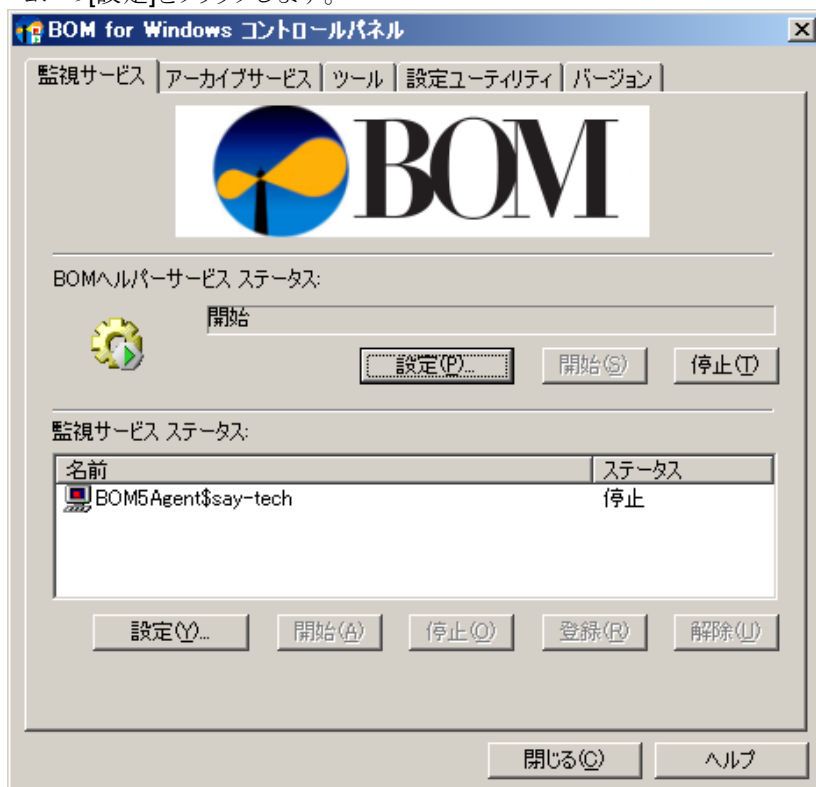
また、BOM5.0SR3 から「Oracle Provider for OLE DB」が必要になります。Oracle インストール時に Oracle の本コンポーネントをインストール下さい。インストールの手順は Oracle Database インストールマニュアルを参照下さい。

なお、このマニュアルに記述のない、最新情報が [Readme.htm](#) に記述されていることがあります。必ず内容をご確認下さいようお願い致します。

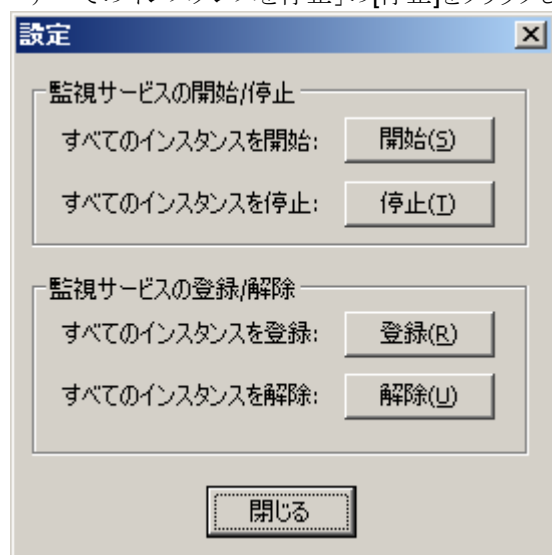
- ◆ Oracle オプションを導入・運用するエンジニアは、BOM5.0、使用している Windows オペレーティングシステム、ネットワーク環境及び Oracle についての十分な知識と情報を持っていることが前提となります。

1 - 1 事前準備

- BOM5.0 がインストールされているかを確認してください。
- スタートメニューから BOM コントロールパネルを起動して[監視サービス]タブの[監視サービスステータス]セクションの[設定]をクリックします。



「すべてのインスタンスを停止」の[停止]をクリックし、ローカルコンピュータのインスタンス監視をすべて停止します。



1 - 2 インストール

Oracle オプションのインストールは Oracle オプションモジュールのインストールと Oracle オプション用ライセンスキーをライセンスマネージャからキー入力することによって行います。

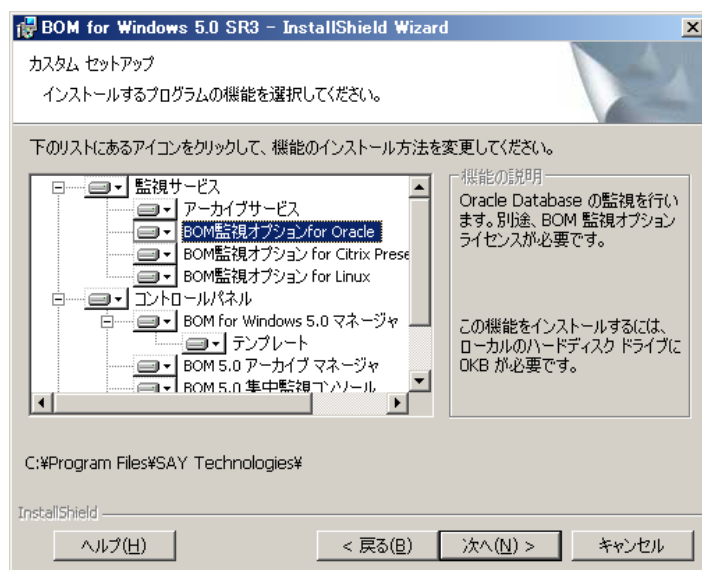
Oracle オプションモジュールのインストールに関しては BOM5.0 のカスタムインストールで行います。Oracle オプション独自のインストーラを起動することはありません。

1 - 2 - 1 インストール手順

Oracle オプションのインストールは a.Oracle オプションモジュールのインストールと b.Oracle オプション用ライセンスキーをライセンスマネージャからキー入力することによって行います。

a. Oracle オプションモジュールのインストール

1. BOM5.0 のメディアを CD-ROM に挿入します。
2. Windows のコントロールパネルから[アプリケーションの追加と削除]で BOM5.0 の[変更と削除]をクリックします。[変更]をクリックし、[次へ]をクリックします。
3. カスタムセットアップ画面から[BOM 監視オプション for Oracle]を選択し、[次へ]をクリックします。完了画面が出れば Oracle オプションモジュールのインストールは完了です。



4. Oracle オプションモジュールのインストールが完了しましたら、「BOM for Windows (XXXXX)」スナップインノードのヘルパーサービスに接続し、プロパティページから「Oracle 接続設定」タブが追加されたことを確認できます。

4. [キーを追加]をクリックします。[ライセンスキーの追加画面]が表示されます。

ライセンスキー(L):

BOM 5.0 オラクルオプション 通常版ライセンス

確認(E)

インスタンスを選択してください(I):

インスタンス ID	ライセンス数	状態
saytech1	0/200	
saytech2	0/200	
[未割り当て]	-	-

備考:基本製品の評価版ライセンスは、再入力および削除ができません。オプション製品の評価版ライセンスの入力は1回限りとなり、削除ができません。

OK キャンセル

5. Oracle オプションのライセンスキーを入力し、OKをクリックします。
6. [ライセンスキーの追加]画面は消え、[ライセンス管理]画面に戻ります。
7. 入力した Oracle オプションのライセンスキーが画面上にあるのを確認してください。
8. 画面上の「状態」の欄が「オプション」であればオプションのキーであることを示します。

コンピュータ: saytech1

登録済みのライセンスキーと割り当て状況(L):

インスタンス ID	ライセンスキー	カテゴリ	ライセンス数	状態
saytech1	...	通常版	0/200	
saytech2	...	通常版	0/200	
		評価版	-/200	[オプション] [未割り当て][期限切れ][2007/10/31-200...]

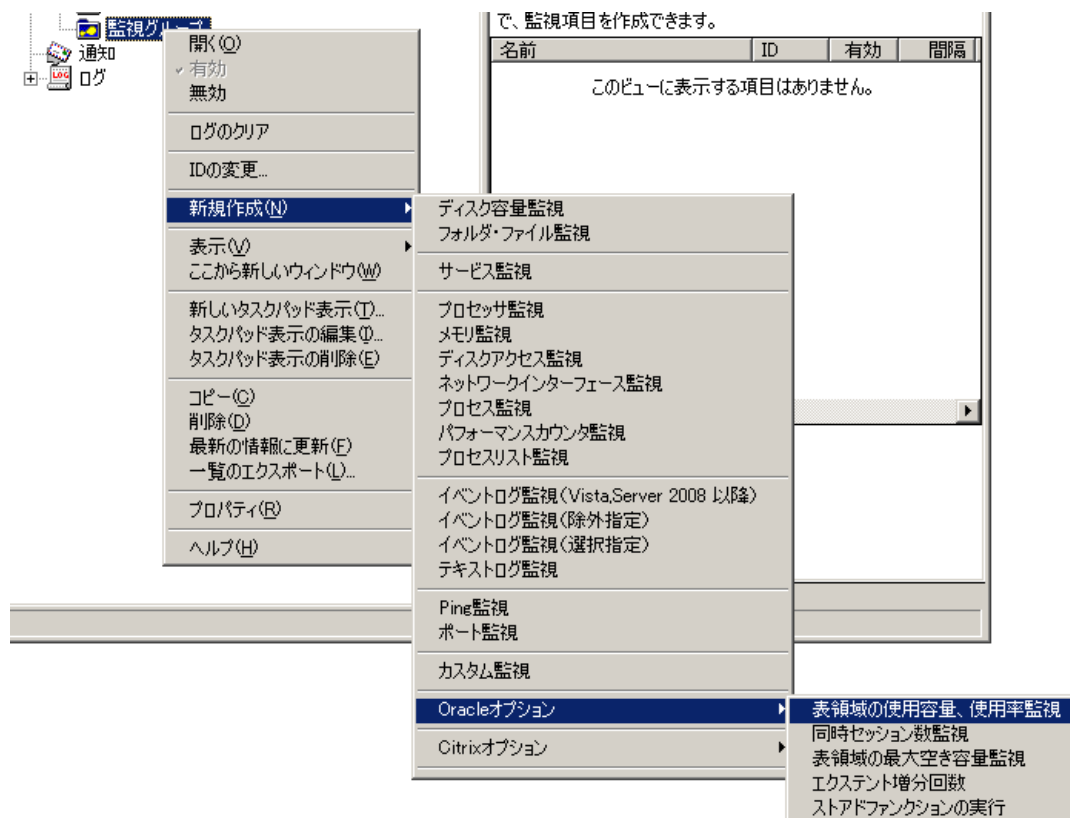
キーの詳細情報:

キーを追加(A)... キーを削除(D) 割り当ての変更(M)... 閉じる

9. ライセンスキーをクリックすると[キーの詳細情報]が出てきます。
10. 上記のように[ライセンス管理]画面で追加登録されたキーの[状態]が[オプション]と表示されていればインストールは終了です。

c. Oracle オプション監視項目メニューの状態確認

上記「a.」と「b.」の作業が完了できましたら、該当するインスタンスを停止し、「監視」ノードの下、任意の「監視グループ」ノードを右クリックして、表示されたメニューから「新規作成」→「Oracle オプション」をクリックすると、選択可能な Oracle オプションの監視項目メニューが表示されることを確認できます。



1 - 3 アンインストール

Oracle オプションのアンインストールは、Oracle オプションのライセンスキーをライセンスマネージャから削除する処理と Oracle オプションモジュールを削除する処理を行います。

Oracle オプションをアンインストールする前に、以下の作業を行ってください。

- ローカルコンピュータの管理者権限を持つユーザーアカウントで、コンピュータにログインしてください。
- スタートメニューから BOM コントロールパネルを起動して[監視サービス]タブの[監視サービスステータス]セクションの[設定]をクリックします。「すべてのインスタンスを停止」の[停止]をクリックし、ローカルコンピュータのインスタンス監視をすべて停止します。

1 - 3 - 1 アンインストール手順

a. ライセンスキーの削除

1. BOM 5.0 マネージャ を起動し、「接続」をクリックします。
2. 同じスナップイン下のインスタンスが全て停止していることを確認します。
3. BOM for Windows (ローカル)を右クリックし、メニューから「ライセンスマネージャ...」をクリックします。
4. 現在使用している Oracle オプションのキーをクリックします。
5. [キーを削除]をクリックします。これでキーの削除は終了しました。

b. Oracle オプションモジュールのアンインストール

1. Windows のコントロールパネルから[アプリケーションの追加と削除]で[BOM for Windows Ver.5.0SR3]の[変更と削除]をクリックします。[変更]をクリックし、[次へ]をクリックします。
2. 機能の選択画面から[BOM 監視オプション for Oracle]のチェックをはずし、[次へ]をクリックします。

3. 完了画面がされ、Oracle オプションモジュールのアンインストールが完了します。

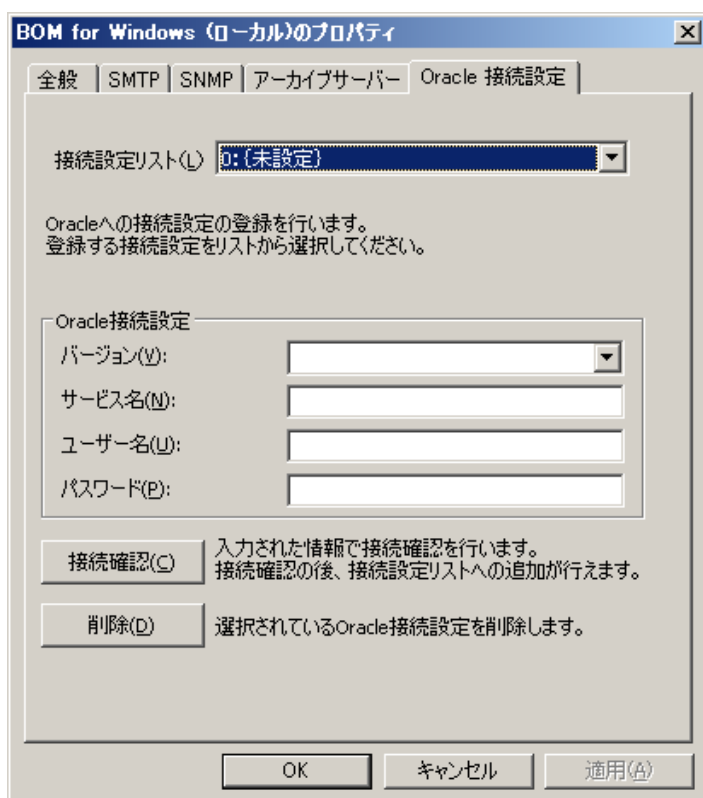
2 Oracle 接続情報の登録と削除

Oracle 監視を実行する為、Oracle データベースサービスの接続情報を事前に登録する必要があります。

Oracle データベースサービスの接続情報の登録と削除処理を行う前に、同じスナップインに登録されているインスタンスを全て停止する必要があります。

2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録

1. BOM for Windows ノードを右クリックして[プロパティ]をクリックしプロパティ画面が開き「Oracle 接続設定」タブをクリックします。



注意：[接続確認]ボタンはリモート接続で Oracle コンピュータの BOM に接続しても動作しますが、BOM5.0SR2 以前をインストールした Oracle コンピュータの BOM と接続するとインアクティブになります。

2. 接続設定リスト
接続設定リストから登録されている接続情報をクリックすると該当する接続情報の詳細は Oracle 接続設定枠に表示されます。

3. Oracle 接続設定

Oracle 接続設定枠内の下記の項目の設定を行います。

- バージョン : 監視対象 Oracle が 32bit 版(OLEDB32)か 64bit 版(OLEDB64)かの設定を行います。
- サービス名 : 接続先のサービス名を指定します。
- ユーザー名 : 監視対象 Oracle への接続ユーザー名を指定します。
- パスワード : 監視対象 Oracle への接続ユーザー名のパスワードを指定します。

Oracle オプションは監視を行う際に、ここで設定した Oracle ユーザー名とパスワードを使用して監視を行います。

注:バージョンの選択肢が BOM5.0SR3 で変更になりました。BOM5.0SR2 以前では、Oracle のバージョン (9i,10g,11g 等)を選択していましたが、BOM5.05.0SR3 では、Oracle が 32bit 版か 64bit 版かを選択するように変更になりました。なお、この選択肢は BOM の動作 OS が 32bitOS の場合には OLEDB64 は出てきません。すべて OLEDB32 で設定します。

SR2 以前の ORACLE 設定がある場合 (アップグレード・設定のインポート時など)「バージョン」コンボボックスにすでに設定されている ORACLE 接続バージョンが「OLEDB32」「OLEDB64」と共に表示され、選択可能になります。これはすでに設定されているもののみです。(互換性のためです)

例えば、SR2 にて「11gr1」を使用していた設定を SR3 へ移行した場合、「バージョン」コンボボックスに表示される値は、「OLEDB32」「OLEDB64」「11gr1」となります。

4. Oracle 接続確認

「3. Oracle 接続設定」で指定した接続情報で Oracle データベースサービスに接続確認を行います。該当する接続情報が接続設定リストに登録されます。

「OK」 或いは「適用」 ボタンをクリックすると該当する接続情報が設定ファイルに保存されます。

5. 同一コンピュータに複数の Oracle のインスタンスが存在する場合には、上記の操作の 1~4 を繰り返して登録された接続設定を複数持つことが可能です。

2 - 2 Oracle データベースサービス接続情報の削除

1. 接続設定の選択

接続リストから削除の対象となる接続情報をクリックし、接続設定枠に詳細情報を表示されます。

2. 接続設定の削除

接続設定枠の詳細情報を確認し、「削除」ボタンをクリックすれば該当する接続情報が接続設定リストから削除されます。

「OK」或いは「適用」ボタンをクリックすると該当する接続情報が設定ファイルから削除されます。

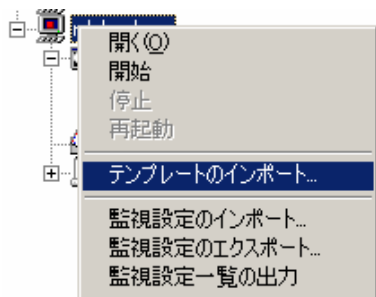
3 監視項目の作成

監視項目を作成する為に監視グループを先に作成する必要があります。

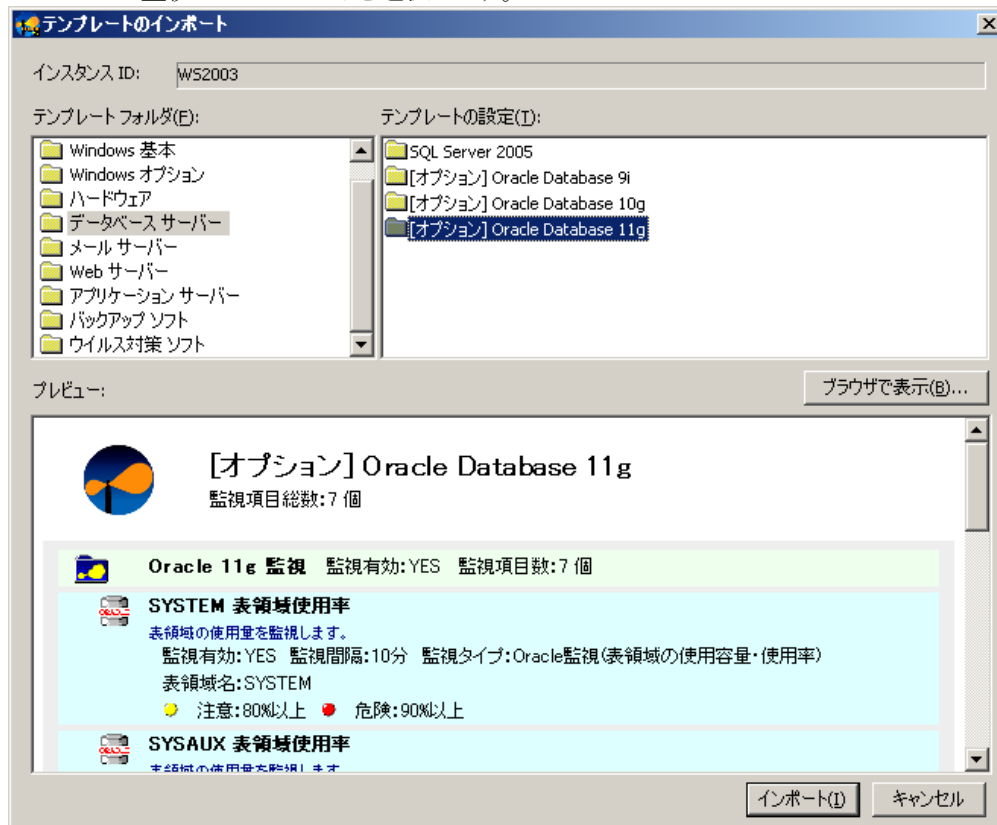
監視グループはテンプレートのインポートより作成するか、インスタンスノード下の「監視」ノードのポップアップメニューの「新規作成」の「監視グループ」で作成します。

3-1 テンプレートのインポートより作成

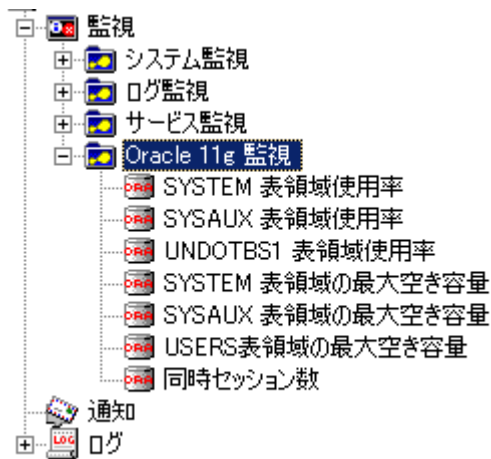
1. インスタンスが停止していることを確認します。
2. インスタンスノードを右クリックして
ポップアップメニューのテンプレートのインポート
をクリックすると[テンプレートのインポート]画面が
開きます。



3. Oracle 監視のテンプレートを選択します。



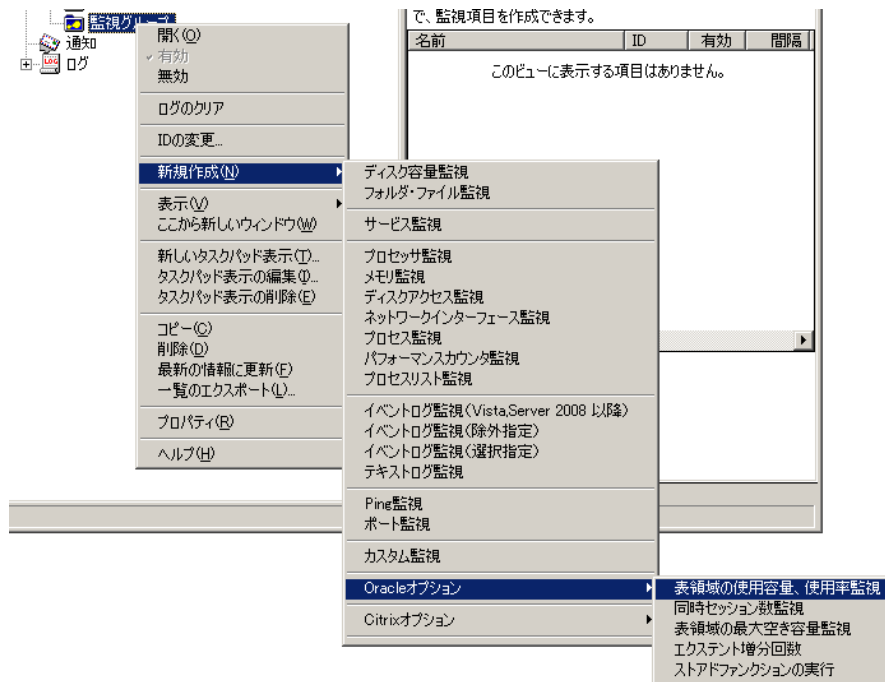
4. テンプレートをインポートします。
[インポート]ボタンをクリックすると該当するテンプレートが一つの監視グループとしてインポートされます。
5. 監視グループが作成されていることを確認します。
「監視」ノードをクリックして、それぞれのテンプレートに従ったグループが作成されていることを確認できます。



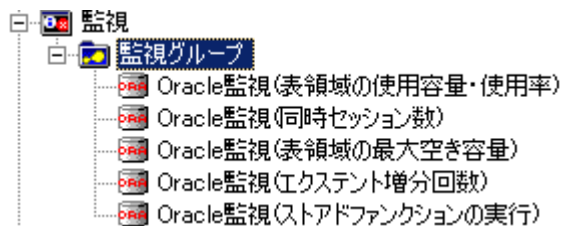
上記にない監視項目は「Oracle オプション」メニューから追加できます。

3 - 2 「監視」ノードのポップアップメニューより作成

1. 「監視」ノードを右クリックしてポップアップメニューから監視グループを作成します。
2. 監視グループが作成されていることを確認します。
「監視」ノードをクリックして、監視グループが作成されていることを確認します。
3. 「監視グループ」ノードを右クリックして、ポップアップメニュー「新規作成」→「Oracle オプション」下のメニューをクリックし、Oracle 監視項目を作成します。



4. Oracle 監視項目が作成されていることを確認します。



4 各監視項目の機能と設定方法

本章では、各監視項目の機能及び監視設定方法について説明します。

Oracle オプションでは、以下の監視を行うことができます。

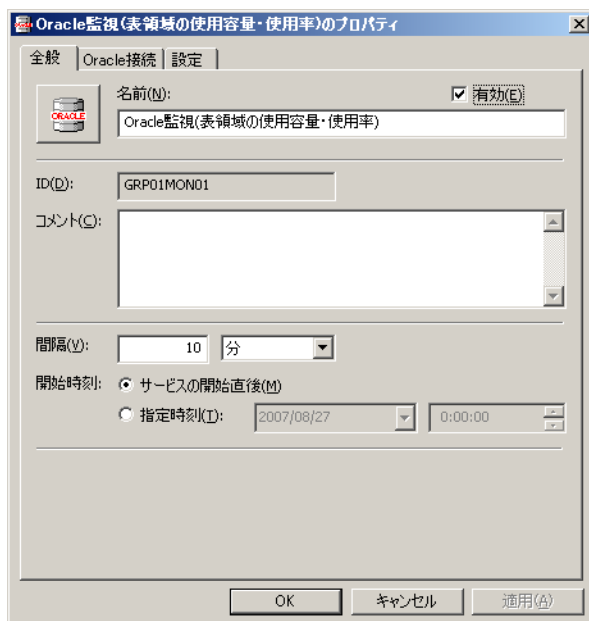
- 表領域の使用容量、使用率
- 同時セッション数
- 表領域中の最大空き容量
- エクステントの増分回数
- ストアドファンクションの実行

※ 上記以外に、Oracle関連のサービスやイベントログ、パフォーマンスカウンタの監視、その他(プロセス稼働率、ディレクトリ・ファイルサイズ)の監視は、BOM5.0の標準機能で監視を行ってください。

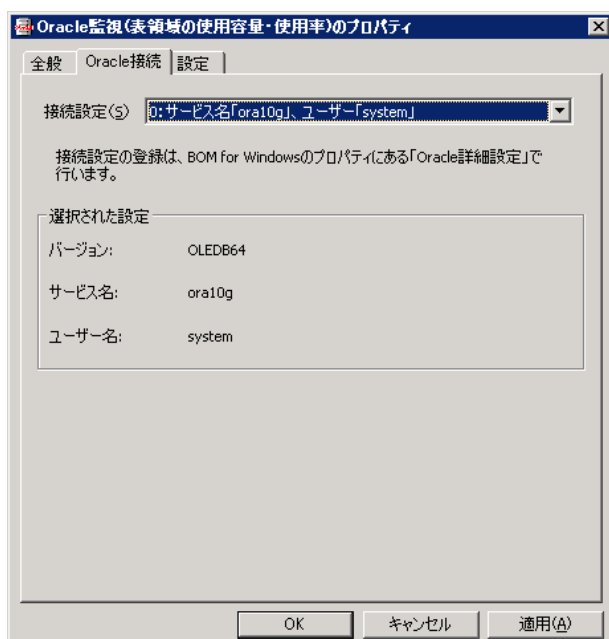
4 - 1 表領域の使用容量、使用率監視

この監視項目は、表領域の使用サイズ、使用率を取得し、判定条件に従ったステータスを表示します。

1. [新規作成]→[Oracle オプション]→[表領域の使用容量、使用率監視]をクリックします。
 - A) 本監視項目を有効にするかどうかの設定を[有効]のチェックボックスで行います。有効の場合にはチェックに印を入れます。
 - B) 本項目の監視を行う時間間隔 (半角数値と時間単位) を入力します。秒、分、時間、日で指定が可能です。デフォルトは 10 分です。数値は 9999 まで入力出来ます。
 - C) 監視開始時刻はインスタンス監視開始直後か指定時刻を指定することが可能です。



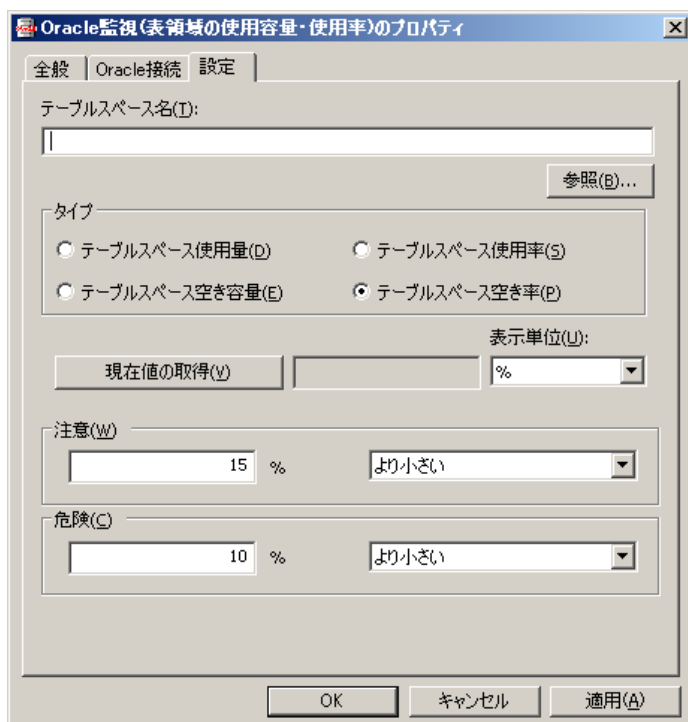
2. [Oracle 接続]タブをクリックします。「2-1.Oracle データサービス接続情報の登録」で設定した Oracle 接続設定を選択します。



※ 注意:

「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を行わずに監視を実行した場合、[ログ]-[ヒストリ]-[監視]に「パラメータ設定に失敗しました。」というメッセージが記述されます。また、そのエラーメッセージが出力された後、監視が無効になります。無効になった後は監視が実行されません。必ず、監視項目を作成した後は、ログが連続で出力されるかをご確認下さい。もし、監視が行われていない場合には、「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を再度確認してください。

3. [設定]タブで表領域の使用容量・使用率の設定を行います。



- A) [参照]をクリックします。設定したユーザー名とパスワードで見ることのできるテーブルスペース名の一覧が表示されます。表示されたリストより監視対象のテーブルスペース名をクリックします。
- B) 監視タイプをクリックします。タイプには 4 種類あります。「テーブルスペース使用量」、「テーブルスペース使用率」、「テーブルスペース空き容量」、「テーブルスペース空き率」です。
使用量、空き容量については、実際の bytes,KB,MB,GB 単位で指定が可能です。
使用率、空き率については%にて指定します。
- C) [現在の値の取得]にて現在の値を取得することができます。
- D) [注意]しきい値を設定します。使用量、空き容量の場合には、「と等しい」「と等しくない」「より大きい」「より小さい」「以上」「以下」の条件が選択できます。
- E) [危険]しきい値の設定については、[注意]しきい値の設定に加えて「連続した N 回目の注意から」が選択できます。注意が指定した回数以上連続して続いた場合に危険になるというステータスです。

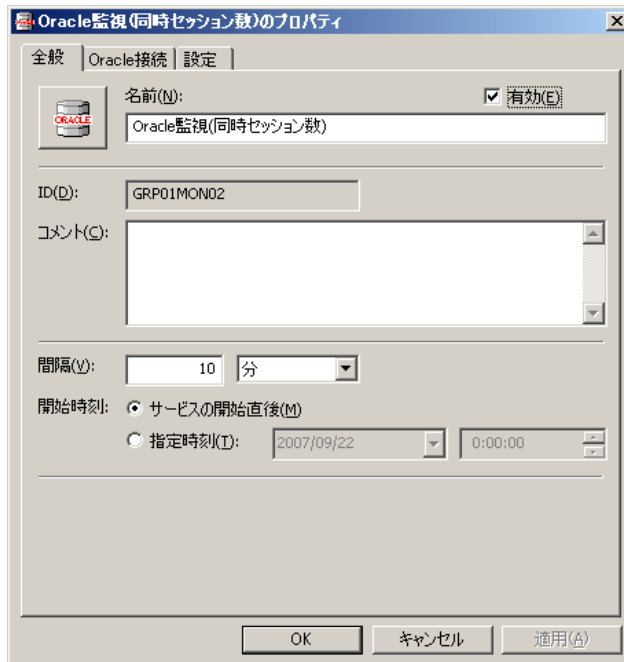
※ 注意:

BOM5.0SR3 よりローカル管理の一時表領域を監視できるようになりました。ただし、BOM5.0SR2 以前のバージョンからアップグレードした場合、そのままの監視項目では監視できません。ローカル管理の一時表領域を監視するには、「2-1 の Oracle データベースサービス接続情報の登録」で再度接続設定を実施し、各監視項目の再設定を行って下さい。

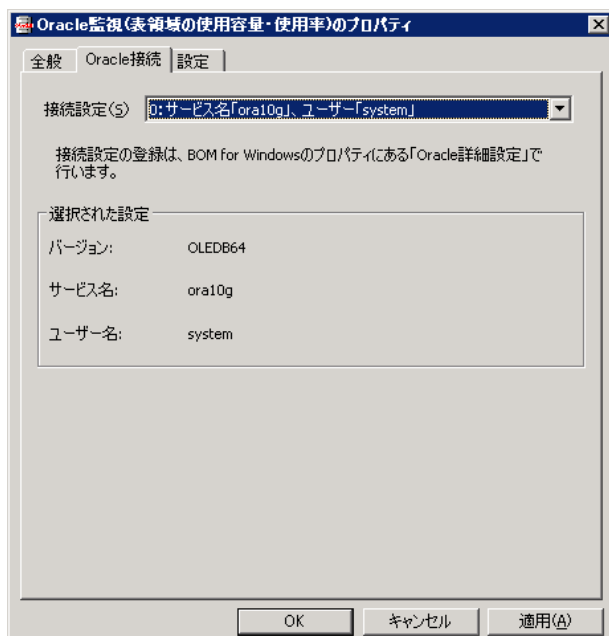
4 - 2 同時セッション数監視

この監視項目は、Oracle に接続されたクライアントのセッション数を監視します。

1. [新規作成]→[Oracle オプション]→[同時セッション数監視]をクリックします。
 - A) 本監視項目を有効にするかどうかの設定を[有効]のチェックボックスで行います。有効の場合にはチェックに印を入れます。
 - B) 本項目の監視を行う時間間隔 (半角数値と時間単位) を入力します。秒、分、時間、日で指定が可能です。デフォルトは 10 分です。数値は 9999 まで入力出来ます。
 - C) 監視開始時刻はインスタンス監視開始直後か指定時刻を指定することが可能です。



2. [Oracle 接続]タブをクリックします。「2-1.Oracle データサービス接続情報の登録」で設定した Oracle 接続設定を選択します。



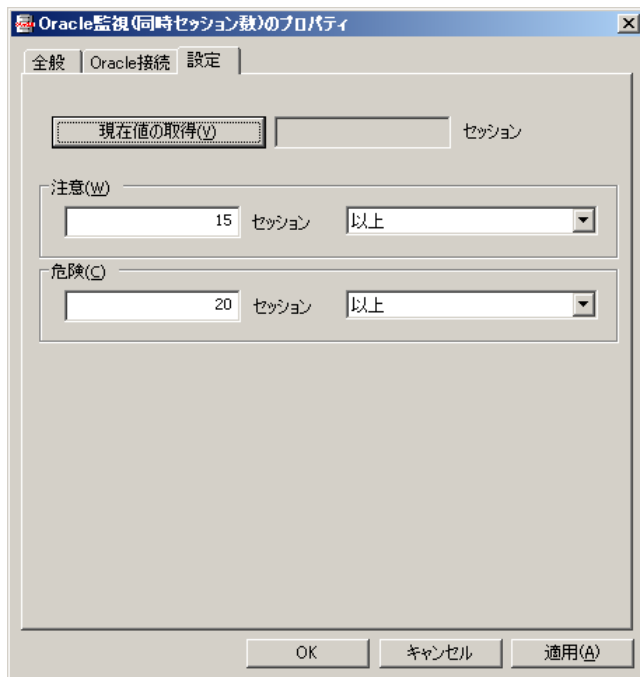
※ 注意:

「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を行わずに監視を実行した場合、[ログ]-[ヒストリ]-[監視]に「パラメータ設定に失敗しました。」というメッセージが記述されます。また、そのエラーメッセージが出力された後、監視が無効になります。無効になった後は監視が実行されません。必ず、監視項目を作成した後は、ログが連続で出力されるかをご確認下さい。もし、監視が行われていない場合には、「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を再度確認してください。

3. [設定]タブでセッション数の設定を行います。

なお、セッション数は BOM5.0 が接続しているセッション数も含まれますので、それを考慮に入れて設定してください。

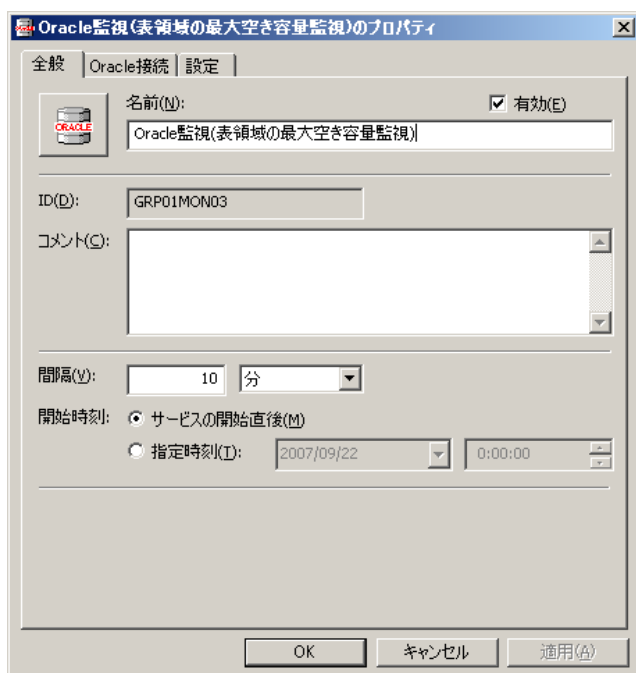
- A) [現在の値の取得]にて現在の値を取得することができます。
- B) [注意]しきい値を設定します。条件としては指定したセッション数に対して、「と等しい」「と等しくない」「より大きい」「より小さい」「以上」「以下」の条件が選択できます。
- C) [危険]しきい値の設定については、[注意]しきい値の設定に加えて「連続した N 回目の注意から」が選択できます。注意が指定した回数以上連続して続いた場合に危険になるというステータスです。



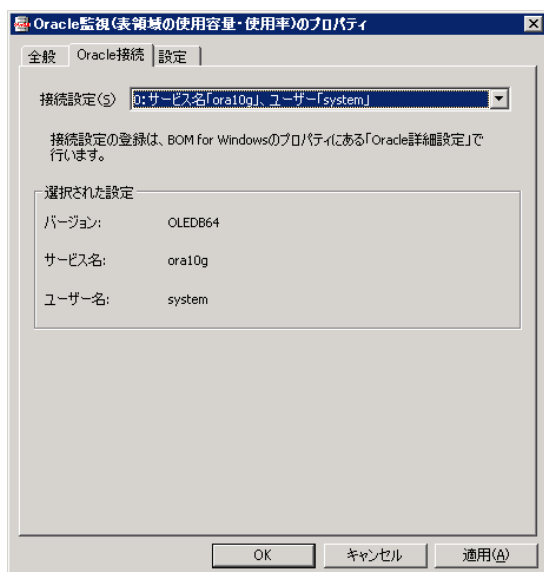
4 - 3 表領域の最大空き容量監視

この監視項目は、指定された表領域のデータファイル(セグメント)中の空き容量が一番大きい数値を取得し、判定条件に従ったステータスを表示します。

1. [新規作成]→[Oracle オプション]→[表領域の最大空き容量監視]をクリックします。
 - A) 本監視項目を有効にするかどうかの設定を[有効]のチェックボックスで行います。有効の場合にはチェックに印を入れます。
 - B) 本項目の監視を行う時間間隔(半角数値と時間単位)を入力します。秒、分、時間、日で指定が可能です。デフォルトは10分です。数値は9999まで入力出来ます。
 - C) 監視開始時刻はインスタンス監視開始直後か指定時刻を指定することが可能です。



2. [Oracle 接続]タブをクリックします。「Oracle データベースサービス接続情報の登録」設定した Oracle 接続設定をクリックします。



※ 注 1:

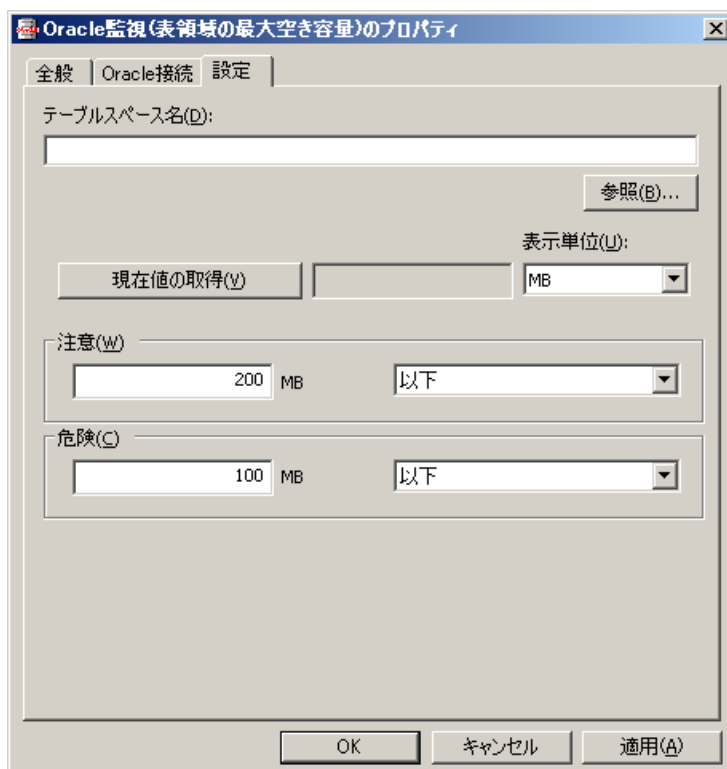
「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を行わずに監視を実行した場合、[ログ]-[ヒストリ]-[監視]に「パラメータ設定に失敗しました。」というメッセージが記述されます。また、そのエラーメッセージが出力された後、監視が無効になります。無効になった後は監視が実行されません。必ず、監視項目を作成した後は、ログが連続で出力されるかをご確認下さい。もし、監視が行われていない場合には、「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を再度確認してください。

※ 注 2:

ローカル管理の一時表領域については本機能（「表領域の最大空き容量」）は対応しておりません。ご注意ください。

3. [設定]タブで空き容量の設定を行います。

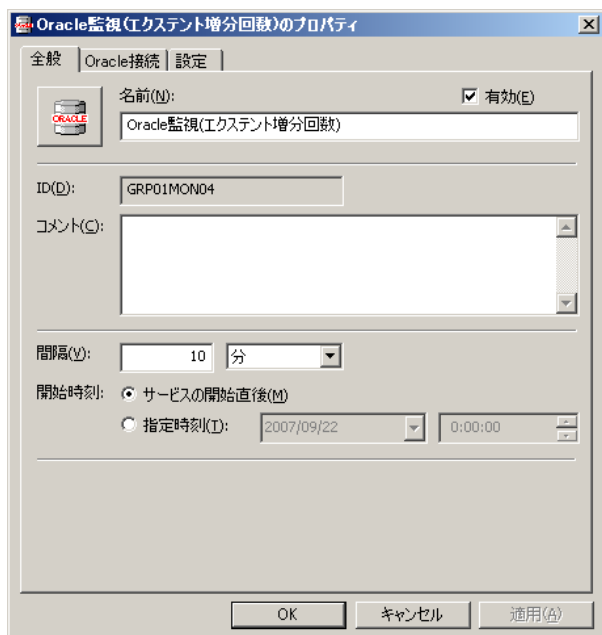
- A) [参照]をクリックします。設定したユーザー名とパスワードで見ることのできるテーブルスペース名の一覧が表示されます。表示されたリストより監視対象のテーブルスペース名をクリックします。
- B) [現在の値の取得]にて現在の値を取得することができます。
- C) [注意]しきい値を設定します。条件としては指定した空き容量に対して「と等しい」「と等しくない」「より大きい」「より小さい」「以上」「以下」の条件が選択できます。単位は **bytes,KB,MB,GB** 単位で指定が可能です。
- D) [危険]しきい値の設定については、[注意]しきい値の設定に加えて「連続した N 回目の注意から」が選択できます。注意が指定した回数以上連続して続いた場合に危険になるというステータスです。



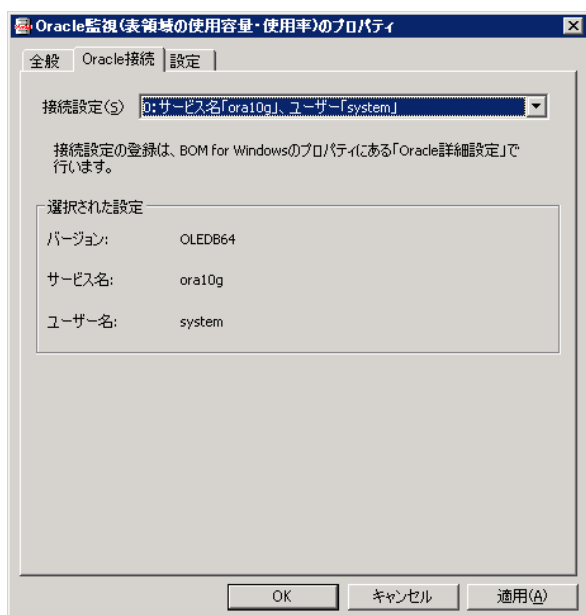
4 - 4 エクステント増分回数監視

この監視項目は、指定したセグメントのエクステント増分回数を取得し、判定条件に従ったステータスを表示します。

1. [新規作成]→[Oracle オプション]→[エクステント増分回数]をクリックします。
 - A) 本監視項目を有効にするかどうかの設定を[有効]のチェックボックスで行います。有効の場合にはチェックに印を入れます。
 - B) 本項目の監視を行う時間間隔 (半角数値と時間単位) を入力します。秒、分、時間、日で指定が可能です。デフォルトは 10 分です。数値は 9999 まで入力出来ます。
 - C) 監視開始時刻はインスタンス監視開始直後か指定時刻を指定することが可能です。



2. [Oracle 接続]タブをクリックします。「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」で設定した Oracle 接続設定をクリックします。



※ 注意:

「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を行わずに監視を実行した場合、[ログ]-[ヒストリ]-[監視]に「パラメータ設定に失敗しました。」というメッセージが記述されます。また、そのエラーメッセージが出力された後、監視が無効になります。その後は監視が実行されません。必ず、監視項目を作成した後は、ログが連続で出力されるかをご確認下さい。もし、監視が行われていない場合には、「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を再度確認してください。

3. [設定]タブで表領域の使用容量・使用率の設定を行います。

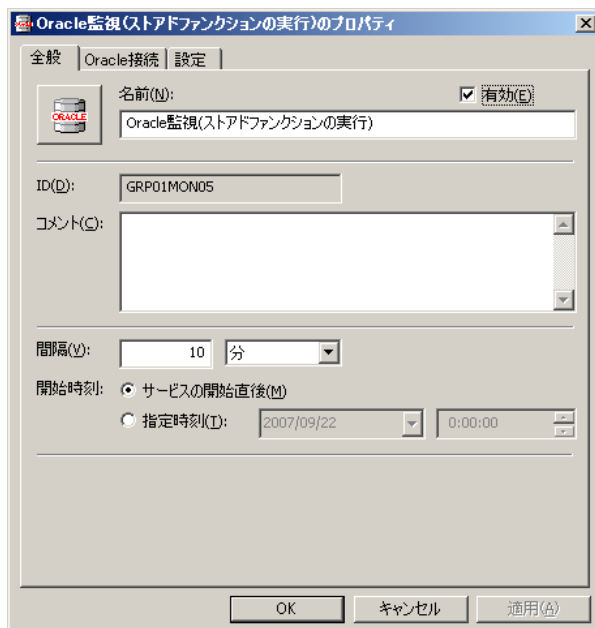
- A) [参照]をクリックします。設定したユーザー名とパスワードで見ることのできるセグメントのスキーマ名、セグメントタイプ、セグメントを指定します。
- B) [現在の値の取得]にて現在の値を取得することができます。
- C) [注意]しきい値を設定します。条件は指定した回数に対して「と等しい」「と等しくない」「より大きい」「より小さい」「以上」「以下」の条件が選択できます。
- D) [危険]しきい値の設定については、[注意]しきい値の設定に加えて「連続した N 回目の注意から」が選択できます。注意が指定した回数以上連続して続いた場合に危険になるというステータスです。

The screenshot shows a dialog box titled "Oracle監視(エクステント増分回数)のプロパティ" with a "設定" (Settings) tab selected. The "オブジェクト" (Object) section contains fields for "スキーマ(オーナー)名(S):", "オブジェクトタイプ(T):", and "オブジェクト(O):", with a "参照(R)..." button. Below this is a "現在の値の取得(V)" button and a numeric input field. The "注意(W)" (Warning) section has a numeric input field set to "15" and a dropdown menu set to "以上". The "危険(C)" (Danger) section has a numeric input field set to "20" and a dropdown menu set to "以上". At the bottom are "OK", "キャンセル", and "適用(A)" buttons.

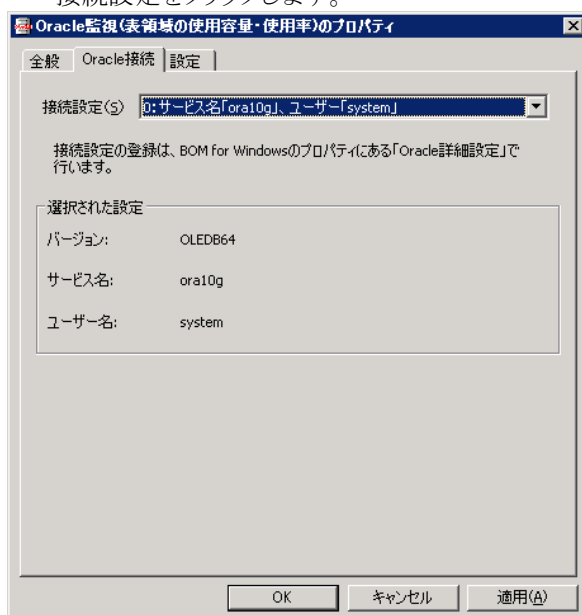
4 - 5 ストアドファンクションの実行

この監視項目は、指定されたストアドファンクション(返り値をもつストアドプログラム)を実行して、その戻り値(数値あるいは文字列)を取得し、判定条件に従ったステータスを表示します。

1. [新規作成]→[Oracle オプション]→[ストアドファンクションの実行]をクリックします。
 - A) 本監視項目を有効にするかどうかの設定を[有効]のチェックボックスで行います。有効の場合にはチェックに印を入れます。
 - B) 本項目の監視を行う時間間隔(半角数値と時間単位)を入力します。秒、分、時間、日で指定が可能です。デフォルトは 10 分です。数値は 9999 まで入力出来ます。
 - C) 監視開始時刻はインスタンス監視開始直後か指定時刻を指定することが可能です。



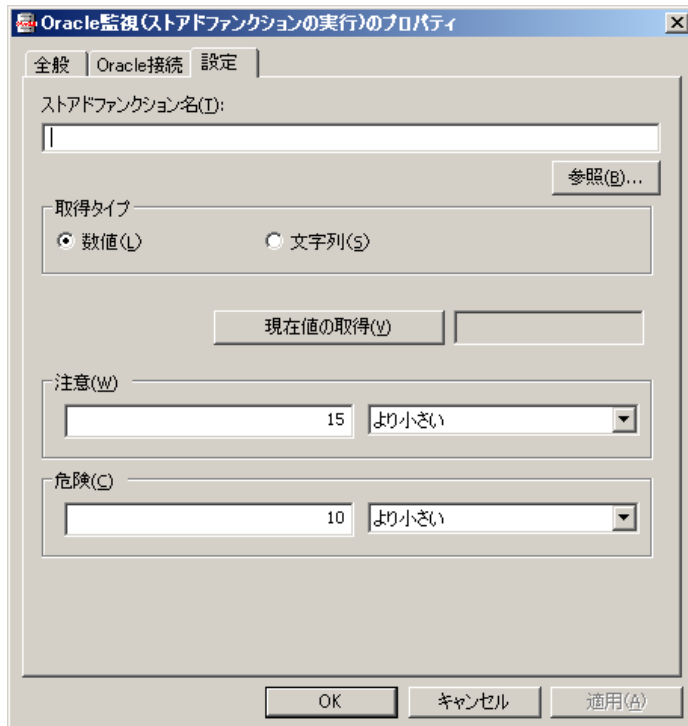
2. [Oracle 接続]タブをクリックします。「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」で設定した Oracle 接続設定をクリックします。



※ 注意:

「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を行わずに監視を実行した場合、[ログ]-[ヒストリ]-[監視]に「パラメータ設定に失敗しました。」というメッセージが記述されます。また、そのエラーメッセージが出力された後、監視が無効になります。無効になった後は監視が実行されません。必ず、監視項目を作成した後は、ログが連続で出力されるかをご確認下さい。もし、監視が行われていない場合には、「2 - 1 Oracle データベースサービス接続情報の登録」の接続設定を再度確認してください。

3. [設定]タブで表領域の使用容量・使用率の設定を行います。



- A) [参照]をクリックします。設定したユーザー名とパスワードで見ることのできるストアドファンクションのリストを見ることができます。
- B) [取得タイプ]ではストアドファンクションが返値として返す型が数値なのか文字列なのかを指定します。
- C) [現在の値の取得]にて指定したストアドファンクションを実行して現在の値を取得することができます。
- D) [注意]しきい値を設定します。条件は指定した値に対して「と等しい」「と等しくない」「より大きい」「より小さい」「以上」「以下」の条件が選択できます。
- E) [危険]しきい値の設定については、[注意]しきい値の設定に加えて「連続した N 回目の注意から」が選択できます。注意が指定した回数以上連続して続いた場合に危険になるというステータスです。

5 付録

5 - 1 BOM の各監視項目のエラーメッセージ

エラーコード、エラーメッセージには以下の種類があります。

エラーメッセージの他に以下のエラーコードを状況に併せて組み合わせて現れます。

「OS エラー:xxxx(0xXXXX)」

OS のエラーコードが記述されます。

「データベースエラー:xxxxxxxxxx」

Oracle が返すエラーコードとメッセージです。ORA-XXXXX のエラーコードは使用されている Oracle データベースのマニュアル等をご参照ください。

「Oracle オプションのエラーコード」

以下の表の内容のエラーコードが記述されます。

エラーコード	エラーメッセージ
0xE004C001	COM の初期化に失敗しました。
0xE004C002	レジストリのオープンに失敗しました。
0xE004C003	接続ユーザ名が指定されていません。
0xE004C004	接続パスワードが指定されていません。
0xE004C005	接続種別が指定されていません。
0xE004C006	接続先 DB が指定されていません。
0xE004C007	COM サーバの初期化に失敗しました。
0xE004C021	パラメータにヌルを指定されました。
0xE004C022	監視パラメータ設定がなされていません。
0xE004C023	監視オブジェクトの初期化に失敗しました。
0xE004C024	監視中に不明なエラーが発生しました。
0xE004A001	データベースへ接続できません。データソースの初期化に失敗しました。
0xE004A002	データベースへ接続できません。Oracle OLEDB Provider の取得に失敗しました。
0xE004A101	ストアドプロシジャールの呼出しに失敗しました。
0xE004A201	セッション数の取得に失敗しました。
0xE004A301	指定したテーブルスペース(xxxxx)は存在しません。
0xE004A302	テーブルスペース監視中にエラーが発生しました。
0xE004A401	指定したテーブルスペース(xxxxx)は存在しません。
0xE004A402	一時表領域(xxxxx)のエクステント最大空容量監視はサポートしていません。
0xE004A403	テーブルスペース最大空き容量監視の実行に失敗しました。
0xE004A501	指定したエクステント(セグメント名:xxx,セグメント種別:xxx,オーナ名:xxx)は存在しません。
0xE004A502	Extend 増分監視の実行に失敗しました。
0xE004A601	テーブルスペース一覧取得に失敗しました。
0xE004A701	ストアドファンクション一覧の取得に失敗しました。
0xE004A801	セグメント一覧の取得に失敗しました。
0xE004A901	セグメント種別一覧の取得に失敗しました。
0xE004AA01	スキーマ一覧の取得に失敗しました。
0xE004B001	不明なエラーが発生しました。
0xE004A011	Oracle バージョンのチェックに失敗しました。OCI.dll が見つかりません。
0xE004A012	サポート対象外の ORACLE クライアントです。
0xE004A013	監視ライブラリのオープンに失敗しました。
0xE004A014	Oracle データベースへの接続テストに失敗しました。
0xE004A111	ストアドプロシジャールの呼出しに失敗しました。
0xE004A211	セッション数の取得に失敗しました。
0xE004A311	テーブルスペース監視中にエラーが発生しました。
0xE004A411	テーブルスペース最大空き容量監視の実行に失敗しました。
0xE004A511	Extend 増分監視の実行に失敗しました。
0xE004A611	テーブルスペース一覧取得に失敗しました。
0xE004A711	ストアドファンクション一覧の取得に失敗しました。
0xE004A811	セグメント一覧の取得に失敗しました。
0xE004A911	セグメント種別一覧の取得に失敗しました。
0xE004AA11	スキーマ一覧の取得に失敗しました。
0xE004AB11	リストカウントの取得に失敗しました。

BOM 監視オプション for Oracle
ユーザーズ マニュアル

2007年11月8日 初版
2010年2月28日改訂版
著者 セイ・テクノロジー株式会社
発行者 セイ・テクノロジー株式会社
発行 セイ・テクノロジー株式会社
バージョン Ver.5.0.3

Copyright © 2007–2010 SAY Technologies, Inc. All rights reserved.
